

田中喜美編著

『技術教育の諸相』

(学文社、2016年8月、全267頁、本体価格、3500円)

横山悦生

本書は、2016年3月に定年退職された、田中喜美教授とそのもとで学んだ教え子たちが中心になり、編集された「退職記念論文集」である。田中喜美教授は、私にとっては学問上の先輩であり、ここではあえて田中さんと呼ばせていただく。田中さんは名古屋大学教育学部の学部・大学院を卒業・修了され、その技術教育学研究室の出身者の中で最も傑出した研究者であり、東京学芸大学の研究室には、マルクス・エンゲルス全集がおかれていたということ、ある世界では知られていた、「マルクス主義哲学」による技術論に依拠した技術教育論を展開してきた研究者であり、「国民のための技術教育」の創造を目的にして進められた民間教育研究運動である「技術教育研究会」の理論的な指導者の一人でもあった。本書は、名古屋大学技術教育学研究室の伝統である「実証主義的な研究」と田中さんの固有の「理念的な研究」の両要素を持った、教え子たちの研究成果報告書であるといえよう。

本書の構成は以下の通りである。()内は執筆者。

- 序章 Technology Teachers' Educatorへと私を導いてくれた人々—技術教育教員養成史の一断面— (田中喜美)
- 第1部 技術教育史の探求
- 第1章 文部省編纂『小学校教師用 手工教科書』にみる教科書定期の手工科の特異性とその歴史的意義—工作・技術教育における教科書をめぐる議論の系譜— (平沼善明)

- 第2章 師範学校学科課程における手工科教育の位置づけ (疋田祥人)
- 第3章 戦前における城戸幡太郎の職業教育概念の再検討—知的障害児技術教育論の視点から— (尾高進)
- 第4章 長谷川淳の文部省における技術教育の探求と挫折 (丸山剛史)
- 第5章 職業紹介法からの転換過程からみる職業安定法制定の意義 (柴沼俊輔)
- 第6章 アメリカ合衆国における公教育としての職業教育制度の成立と職業教育の公共性—マサチューセッツ州の職業教育制度が全米レベルのそれと与えた影響を中心に— (横尾恒隆)
- 第7章 V.C. フリックランドによる大学における技術教育教員養成のための作業分析の教育実践— (木下龍)
- 第2部 現代の技術教育実践諸課題への探求
- 第8章 技術観をつかむ中学校技術科 87.5 時間—単元「身近な製品を再発明する」の成果を中心に— (川俣純)
- 第9章 知的財産教育における「著作権人格権」の位置づけの検討—田中喜美による問題提起を踏まえて— (村松浩幸)
- 第10章 普通教育としての水産教育を構想する—中学校技術科に「魚介類養殖の技術」を位置づける— (佐々木貴文)
- 第11章 東京都北区立中学校技術教室の改善過程を通してみる普通教育としての技術教育の実習施設の整備に関する現状と課題 (坂口謙一・橋本慎太郎)
- 第12章 自信を育てる機械加工実習の可能性—工業高校機械科における技能向上と自信の育成に関する教育実践報告— (辰巳育男)

- 第13章 2009年版高等学校学習指導要領下における情報学科の教育課程の特徴とその背景—1999年版との比較から—(盛内健志)
- 第14章 技術教育における思考を深めるアクティブスキルの試行(土井康作)
- 第15章 技術科教員と大学教員による授業づくりコミュニティ構築の要件(本多満正)

序章の田中論文は、昨年3月に行われた最終講義をまとめ直したもので、田中さんの研究者・教師教育者としての歩みが描かれている。田中さんは、名古屋大学に入学された時に科学史技術史という学問への関心を柏木教授との出会いによって育まれた。この柏木教授との出会いが学部に進学したときに長谷川淳教授との出会いにつながっていった。大学院に進学してからは、長谷川教授の勧めで、アメリカ技術教育史をテーマとし、ベネットの“History of Manual and Industrial Education from 1870 to 1917”と出会い、それが「生涯の宝」となった。田中さんの出会いは、その後も続いていく。研究者は学生・院生時代にどういう研究者と出会ったかは、とても重要なことであると私は考えているが、田中さんの歩みはそのことを裏付けているように思われる。

第1部は「技術教育史の探求」という表題のもと、7本の論文が掲載されている。手工科の教科書や教員養成に関する論文、城戸幡太郎、長谷川淳の技術教育論、職業安定法の成立過程、スミス・ヒューズ法の成立過程研究、フリックランドの作業分析などを取り上げた論文など、それぞれの研究者が自らの博士論文の内容やそれ以降の研究成果について報告している。そのいづれも興味深い、かつ重要なテーマを追求しているが、私がとりわけ興味を引いたのは、丸山の「長谷川淳の文部省における技術教育の探求と挫折」である。とりわけ、文部省退職の経緯について、長谷川からの聞き取りにより、田中義男の関与について触れ、背後に職業指導の位置づけや内容の問題があったという問題提起をしている。長谷川

の退職がなぜ「技術教育の探求の挫折」になるのか理解に苦しむが、職業指導の問題を技術教育(学)研究者がきちんと取り組んでこなかったことをもう一度見直す必要があるようにおもわれた。「技術教育学の父」と呼ばれてきた細谷俊夫が1944年に出版した『技術教育—成立と課題—』では、「第二部 近代技術教育の諸相」において、「職業指導」はその一つの「相」としてとりあげられていた。しかし、1978年に出版した『技術教育概論』では、「第二部 近代技術教育発達の諸相」において、職業指導については全く論及されなかった。この変化の意味について、これまで誰も論及したことがないように思われる。1944年の本における「職業指導」の細谷の論述を読むと、そこでは「職業実習」にかなりのページをさいている。日本の場合、戦後の学校教育では「職業実習」にほとんど取り込まれなくなったこととこの変化とが関連していると推測するものであるが、紙数も限られているので、ここでは問題提起だけにとどめておく。

第2部は、「現代の技術教育実践諸課題への探求」という表題のもとで、中学校技術科の実践での取り組みにおける生徒の技術観の問題、知的財産教育における「著作権人格権」の位置づけ、普通教育としての水産教育、技術科の実習施設の問題、工業高校機械科における取り組み、高校情報学科の教育課程、技術科におけるアクティブスキル、技術科教員と大学教員との授業づくりの共同研究等の問題を取り上げている。私は、佐々木論文や村松論文はとりわけ興味ふかく読んだ。

本書全体を読んで、田中さんが技術教育のいろいろな分野の研究者、教師教育者、教育実践家を育てあげたことに対して、その功績の大きさにあらためて感心させられた。田中さんでこそなし得た仕事であろう。

(名古屋大学)